



先日東京で、マキタスポーツさんと清水ミチコさんのライブを見ました。芸達者なお二人のコラボレーションは、笑いと音楽を一緒に楽しめる贅沢(ぜいたく)な時間でした。

マキタさんが、コンプライアンス違反をめぐる音ネタを披露しました。昔のヒット曲を歌おうとする、女性を叩(たた)く歌詞が出てくるからDV条例違反でNG!好きな男性を待ち伏せする歌詞はストーカー条例違反でNG!等々、何を歌おうとしても止められて途方に暮れるというもの。誰かを傷つけるような表現は、すぐに葬られるのが令和という時代。確かに昭和は野蛮でした。しかし正義感が独り歩きをして「こんな規制が、本当に人を幸せにするの?」と疑問に思う場面もあります。さて、この人の目に令和はどう映っていたのでしょうか。

343 お笑い芸人 ホーキング青山



本音の衝突こそが分断なくす

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

「史上初の身体障害者お笑いタレント」と自ら名乗り、障害者への他者の善意を笑いに変えて独自のバリアフリー論を唱えていたホーキング青山さんが昨年12月12日に都内の病院で死去したと、所属事務所が発表しました。享年50。死因は明らかにされていません。昨年11月から体調不良を訴え、

自宅療養をされていたとのこと。青山さんは、手足などの関節が未発達で動かない「先天性多発性関節拘縮症(AMC)」でした。発症率は数万人に一人という難病です。普段は、電動車椅子に乗って生活をしていました。青山さんが大川興業から芸人デビューしたのは1994年、20歳のとき。物理学者のホーキング博士の本がベストセラーになっていた頃で、この芸名になったのだといいます。当時は障害者が自分をさらけ出して笑いを取るなど考えられなかった時代で「デビューそのものが事件だった」と、著書『考える障害

者』(新潮新書)で語っています。本書は7年前(2017年)に出版されましたが、社会の空気は何も変わっていないことに気づかれます。たとえばこんな記述。
 △「障害は個性」なんて本当は思ってもいないくせに言う人がいる。
 「障害者の社会参加」なんて本気でさせようと思ってるわけでもないのに言う人もいる。やっぱりタテマエが多すぎるのだ」

「私がいつも不満に思うのは「障害者と健常者の相互理解」と言いながら、どこまでいっても「健常者が障害者を理解すべき」というところですのでの思考が止まってしまつこと、ここに尽きます」

お笑いの世界で本音を述べながら30年近く青山さんは闘い続けた。コンプライアンス違反やらで言葉を閉じ込めるより、本音をぶつけ合える世の中こそが分断をなくすのだな、と彼の本を読んで思いました。まずは、あの国会議員が政務活動費で本書を大量購入し、国民に配るべきです。